

俳句通信

特別作品25句 池田澄子「我は樹に」

特集〈円熟作家17人12句競詠〉

今井千鶴子 「春愁」	松田ひろむ 「燦コロナ」
山下美典 「奈良の初夏」	川村研治 「仮分数」
大木さつき 「紫荊花」	矢須恵山 「花輪廻」
船越淑子 「森林美術館」	
池田啓三 「春はゆく」	
山本つばみ 「花は葉に」	
本田攝子 「四季の風景」	
大輪靖宏 「病中感慨」	
大畑善昭 「李咲く」	
鈴木すぐる 「花の画布」	
落合水尾 「山恋ひ」	
和田順子 「稱名寺」	
栗田やすし 「シャボン玉」	
佐藤麻織 「はけ道」	

【30句近詠】

中村幸子「花のころ」
波戸岡旭「花の宰相(芍薬)」

【連載エッセイ】

老いの俳句・坪内稔典



●作品●高橋さえ子・古川紀一・鈴木しげを・山崎十生・藤田直子・中原道夫・岡山祐子・中村姫路・すずき巴里・
田宮尚樹・谷中隆子・衣川次郎・大竹多可志・富吉 浩・檜山哲彦・森田純一郎・恩田佑布子・
土肥あき子ほか

簗鮒を手繰るきらめき青嵐

宇都宮 敦子

別所沼は我が家の裏庭と言っても良いような所で、家族に漆うようにいつも静かに横たわっている。沼の周囲は丈高い曙杉で囲まれ夏には沢山の蟬が生まれる。夕方羽化のために幹を上る幼虫を見ることがある。浦和は昔から芸術家が多いところで、沼のほとりでも詩碑、句碑、彫像などが楽しめる。通るたびに立ち止まるのが神保光太郎の詩碑で「沼のほとりをめぐりながら神を思ふ 水面に映るひとひらの雲 羊の孤独」とある。かつてよくお見かけした晩年の氏の飄飄とした散歩姿を思い出し、空を見上げてしまう。





特別作品25句

我は樹に

池田澄子

手も脚も古りて愛しや春の雨
TV画面に満月赤く春炬燵
ウイルスの新株とか桃の花芽とか
三月や管制されたくない灯火
三月十日が十一日になる湯舟
日輪の白く在る日の半コート

特集

円熟作家

17人12句競詠

長い句歴を持つ俳人が、
円熟期を迎えて、現在どんな句を作っているか、
17人の俳人にご登場願いました。

今井千鶴子
山下美典
大木さつき
船越淑子
池田啓三
山本つぼみ
本田攝子
大輪靖宏
大畑善昭
鈴木すぐる
落合水尾
和田順子
栗田やすし
佐藤麻績
松田ひろむ
川村研治
矢須恵由

演じる時彦

坪内稔典

演技不足

老いとは演じるものだろう。

俳句で老いを現実のままに表現してもおもしろくない。うんこまみれの赤ちゃんは成長（未来）があるから、そのうんこまでが共感を呼ぶが、老人のうんこときたら単なる汚物である。死があるばかりで未来がないからだろう。でも、肉や脂を多量に食べる中年者のうんこよりはきれいな気がする。

草間時彦に「年寄は風邪引き易し引けば死す」という句がある。これ、年寄りの現実（事実）を言い当てているだろう。だから私は、時々、知人へのメールに引用して、コロナの日々の挨拶に代えている。

でも、この句が名句かという点、そうは思わない。近代俳句ではひととき、写生ということが強調され、現実を見たままに表現することが流行ったが、もしかしたらその悪しき写生の名残りがこの句にはあるかもしれない。「年寄は風邪引き易し」と事実を言って、その後に「引けば死す」

とまたも事実を言ったところに、写生によって事実にこだわった近代俳句の残滓を感じるのだ。

時彦は老いを演じようとした俳人である。「年寄は風邪引き易し引けば死す」は演技力を少し欠いた老いの句ではないだろうか。

時彦は二〇〇三年に八三歳で他界した。年寄りの句は八歳の作であった。

すぐ散つてしまふポピーを買ひにけり
秋刀魚焼く死ぬのがこはい日なりけり
ずぶずぶと梅雨に沈みて睡りけり
初氷空ねんごろに青かりし
耳遠き夫婦冬夜の物語

時彦八〇代の作を草間文彦編『草間時彦集』（俳人協会）から引いた。ポピーの句が一番いいと思う。すぐ散るポピーとそれを買うという行動の対比が、読者にいろんなことを連想させるから。恋をしている人の切ない感情、初月給をもらった日の行為、古希を迎えた心境などなど。この

七十五年目の「第二芸術」

(3) 俳句・総論

筑紫磐井

西東三鬼の『俳愚伝』によれば、戦前の石田波郷と出逢ったばかりの頃の交友を楽しく回想して、酒席で侃々諤々とした議論をしたと書いた上で、

「彼(波郷)はこのように大いに青春を自負して、四十歳に近い私をおびやかしたが、一方では「新興俳句何するものぞ、伝統俳句の最後の晩鐘は、石田波郷がゴウーンとならしてやる」と豪語した。」

と述べている。別章の新興俳句の検挙のところでも、「自ら「伝統俳句の最後の鐘の撞き手」と呼称した波郷にとつて、検挙は、彼の危機の実現であった」と述べているから有名な波郷の「最後の晩鐘」の言葉は戦前のこととして三鬼には印象づけられているわけだ。

しかし、波郷がこの言葉を語っていたかどうかは三鬼の回想だけでは確かではない。これとよく似た言葉が、石田波郷が戦後書いた「現代俳句」三二年四月号編集後記に「自らの俳句の為に、自ら弔鐘を撞きうるものは誰ぞ」とあるからである。波郷のこの編集後記だけは間違いなくあるの

だが、波郷が常時こうした考えをもっていて戦後にも再び書いてしまったと見るべきか、それとも波郷の編集後記の言葉を読み、戦前の回想に三鬼がうまく埋め込んでしまったのか、はつきりしない。

三鬼の回想が余り信用がおけないことはしばらくおく。実は、波郷の編集後記の言葉の意味自体が不明瞭なのである。波郷の編集後記の言葉にあつては、その主語が、三鬼が言っているように新興俳句とか伝統俳句とかを意識しているようには思えないのである。

忠実にこの言葉を分析すれば、「自らの俳句」とは、「自ら」は「他」ではないから、特定派の俳句——「花鳥諷詠俳句の為に、花鳥諷詠俳句の弔鐘を撞く」「新興俳句の為に、人間探求派俳句の弔鐘を撞く」ということになる。これでは意味をなさないから、「およそ(俳人が)あらゆる俳句の為に、俳句の弔鐘を撞く」としか解釈のしようがない。これは第二芸術に近い。

もう一つは、「誰ぞ」とは何の意味か。①反語(いや、